

原 著

大学体育実技の今後のあり方に関して — K 大学健康体育実技履修選択の動向からの考察 —

石田博也*¹ 星島葉子*² 矢野博己*³ 米谷正造*³ 木村一彦*³

要 約

大学生が体育実技に何を期待しているのか、個々人の健康観と運動の接点を持ちえているのかの現状を把握し、今後どのように大学体育を健康教育の一環として位置付け、実践していくべきかについて提示することを目的として、K 大学開講科目健康体育実技 A (球技スポーツ)、健康体育実技 B (体力づくり)、健康体育実技 C (レクリエーション) および健康科学論の受講者 (延べ人数1,090名) を対象としたアンケート調査を実施した。その結果、体育実技は必修が良いとの回答が、必要でないとの回答の39%と多数を占め、大学体育の必要性を認識している学生が多いことが明らかとなった。そして、学生が期待する内容は、「体力健康づくり」であるといった回答が多かったものの、健康体育実技 B (健康増進・体力づくり) よりも、健康体育実技 A (球技スポーツ) を履修・希望する者が多く、また種目も球技系が上位を占めていた。したがって、必ずしも学生の健康づくりの意識と、本学設定の健康体育実技 A, B, C の設定が完全には一致しておらず、検討していく必要性があると考えられた。今後、健康体育実技 A の発展系として、健康増進・体力づくりが展開される実技内容の構築が必要ではないかと思われる。

緒 言

近年、児童、生徒、学生の体力・健康度の低下傾向が顕著になるにつれ、学校体育の現状が外部から評価されにくくなってきている¹⁾。その結果、1990年代、多くの大学スポーツは、一般学生のスポーツの機会であった一般体育が、必修から選択にかわってきた²⁾。また、現在の健康の維持・増進に必要な運動所要量を満たすアクティブ・スポーツ人口は2000年においてはわずかに17.6%と報告され³⁾、大学体育に要求されている生涯学習につながる運動の習慣化の実現に関しても疑問視され、この点も大学体育評価を厳しいものにしていくと考えられる。こうした背景を受け、大学における体育教育は、多様な要望に対して展開されること、初等・中等教育との関連を検討しなくてはならないこと、との指摘がなされるようになってきた⁴⁾。

一方で、K 学園創設の理念の一つである「体をつくる」をになう K 大学健康体育分野は、基礎教育科目の健康・体育分野 (一般体育) として、健康科学論、健康体育演習、健康体育実技 A, B, C が開講されてい

る。このうち、健康体育実技は、より学生の要望に見合うよう、幅広い体育領域を網羅すべく、健康体育実技 A は、体育・スポーツ分野を広くかつ専門的に実践する授業として球技系スポーツを主体とし、健康体育実技 B は、健康増進・体力づくりに関する領域を、さらに健康体育実技 C ではレクリエーション・軽スポーツが実践されている。しかしながら、現在の大学体育がかかえる諸問題に対して、K 大学健康体育実技がどのように展開され、学生がどう評価しているのかについては十分明らかにされていない。

こうした観点から、本調査は大学生を対象として、体育実技に期待するもの、個々人の健康観とスポーツ・身体活動との接点を持ちえているのかの現状を把握し、さらに現在行なわれている体育実技に対する、教員側と受講生の認識のずれを明確にし、今後どのように大学体育を健康教育の一環として位置付け、実践していくべきかについて提言することを目的とした。

調査対象および方法

調査対象は平成13年度 K 大学開講科目健康体育実

*1 川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 健康体育学専攻 *2 川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科 非常勤講師
*3 川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科

(連絡先) 石田博也 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

技 A (球技スポーツ), 健康体育実技 B (健康増進・体力づくり), 健康体育実技 C (レクリエーション・軽スポーツ) および健康科学論の受講者 (延べ1,090名) とした。調査方法は, 平成13年4月から10月にかけて, 自己記入方式によるアンケート調査を採用し, その有効回答率は100%であった。

結 果

日頃の運動不足に関する質問に対して, 「とてもある」328人(30.1%), 「ある」406人(37.2%), 「普通」224人(20.6%), 「充足している」77人(7.1%), 「とても充足している」53人(4.9%), 「無回答」2人(0.2%) であり, 全体の約67%が運動不足を感じている傾向であった(図1)。

調査を行った授業以外の体育科目の履修については, 「健康体育実技 A」202人, 「健康体育実技 B」171人, 「健康体育実技 C」209人, 「健康科学論」302人, 「健康体育演習」774人, 「わからない」50人であった

(図2)。すでに修得した科目は, 「健康体育実技 A」56人, 「健康体育実技 B」14人, 「健康体育実技 C」19人, 「健康科学論」48人, 「履修していない」581人, 「わからない」60人であった(図3)。

健康体育実技 ABC を選択しなかった者の中で, 実技を選択しなかった理由について, 「特になし」とする者138人に対して, 選択しなかった理由が「ある」と答えた者が102人と約半数であった。その理由は「やりたい運動と一致しなかった」25人(24.5%), 「他の教科と重なっている」23人(22.5%), 「運動が上手でない」15人(14.7%), 「運動が好きでない」14人(13.7%), 「健康上の理由」3人(2.9%), 「クラブ・部活動と一致しなかった」1人(1%), 「その他」18人(17.6%), 無回答3人(2.9%) となり, 実技を履修しない理由においては, 「運動が好きでない」や「運動が上手でない」とする運動嫌いを理由に挙げる割合は全体の28%と少数意見であった(図4)。

履修希望はあったが, 履修できなかった科目の有

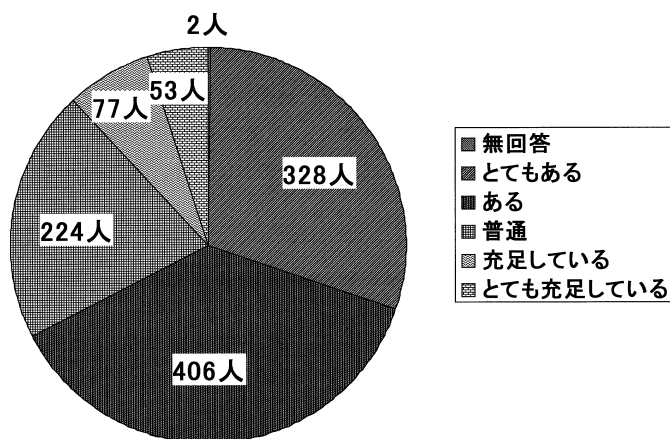


図1 日頃の運動不足に関する調査結果

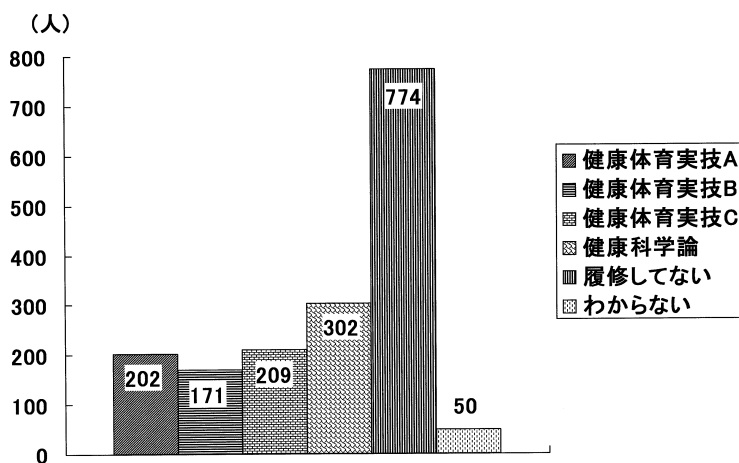


図2 履修届を出した、この授業以外の体育科目の調査結果

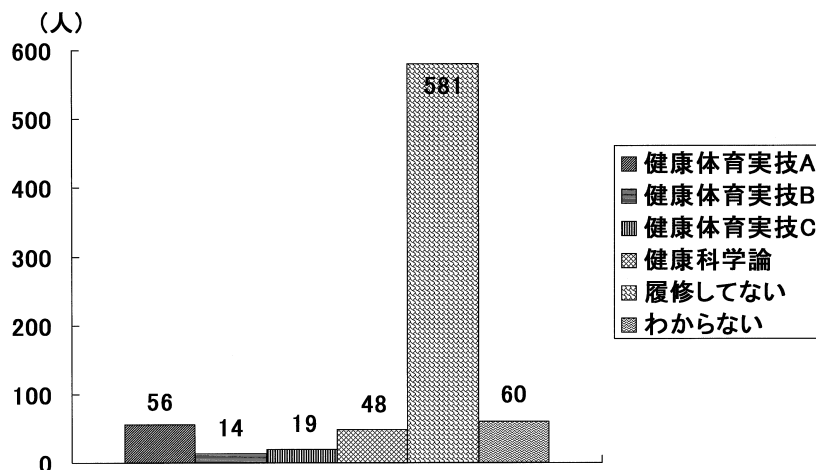


図3 過去に履修した健康体育分野の授業科目の調査結果

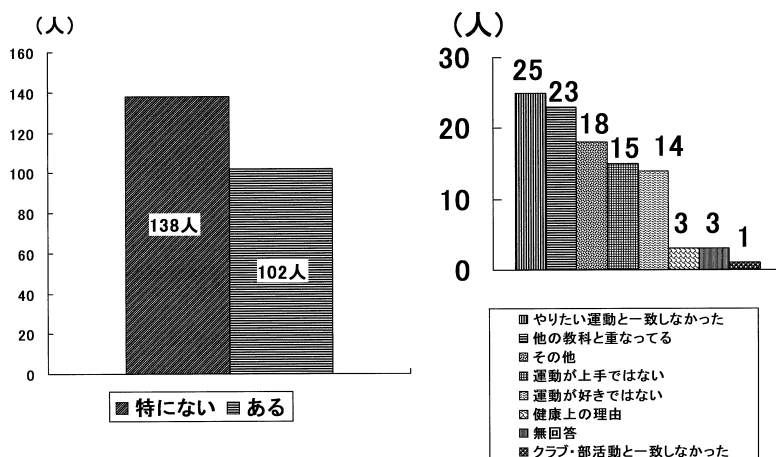


図4 健康体育実技ABCを選択しなかった調査結果
実技を選択しなかった強い理由の調査結果

無については、全体の約71%の者は「ない」と答え、約22%が「ある」と答えた(図5)。履修希望した科目は、「健康体育実技A」147人、「健康体育実技B」42人、「健康体育実技C」54人、「健康科学論」8人であった(図6)。履修希望の科目では、「健康体育実技ABC」で合計203人になり、「健康科学論」といった講義よりも実技への希望が多数を占めた。履修希望はあったが履修できなかった理由は、「抽選もれ」136人(57.1%)、「時間割の都合」47人(19.7%)、「抽選に参加できず」41人(17.2%)、「希望種目なし」5人(2.1%)、「その他」2人(0.8%)、「無回答」7人(2.9%)であった(図7)。履修できなかった理由として、「抽選もれ」が全体の約57%を占め最も多かった。

次学期または次年度に履修したい科目の有無に関しては、「ない」708人(65.0%)、「ある」327人(30.0%)、「無回答」55人(5.0%)であった(図8)。

今後なんらかの科目を希望しているものは、全体の30%であった。今後、履修したい科目は、「健康体育実技A」183人、「健康体育実技B」76人、「健康体育実技C」108人、「健康科学論」35人であった(図8)。「健康体育実技A」の希望が最も多かった。

今後も機会を設けてなんらかの運動を実践したい希望は、「ある」868人(79.6%)、「ない」173人(15.9%)であった(図9)。全体の約80%は今後も運動を希望しており、現時点では運動の習慣化に対する希望を持っていることが示された。

大学の体育実技に期待することに関しては、「スポーツを楽しむ」379人(34.8%)、「運動不足解消」262人(24%)、「健康維持増進」125人(11.5%)、「ストレス解消」103人(9.4%)、「体力の向上」57人(5.2%)、「技術の向上」20人(1.8%)、「特になし」31人(2.8%)、「その他」2人(0.2%)、「無回答」10人(0.9%)であった(図10)。大学体育に期待することで、もっ

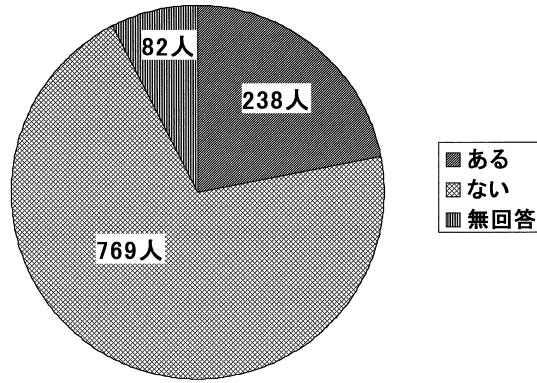


図5 履修希望はあったが履修できなかった科目の有無

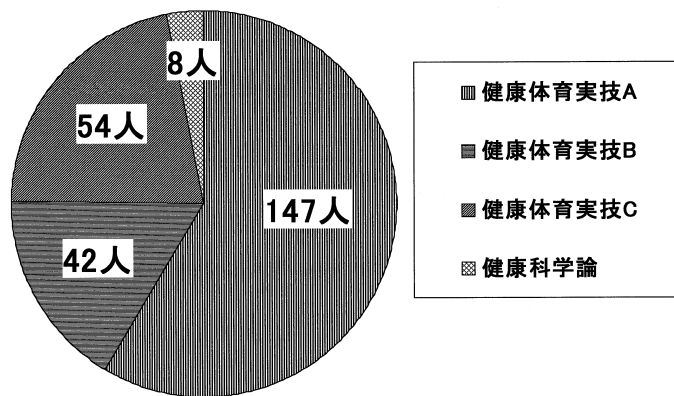


図6 履修希望した科目の調査結果

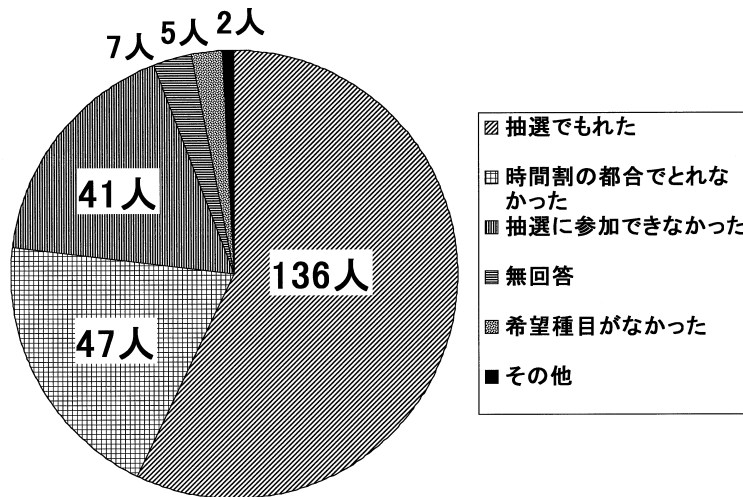


図7 履修希望はあったが履修できなかった理由の調査結果

とも多かったのは「スポーツを楽しむ」であり、「運動不足解消」や「健康維持増進」を上回っていた。

大学体育は必修でよいと思いますか？の質問に対しては、「よい」451人(41.4%)、「わからない」516人(47.3%)、「必要ない」113人(10.4%)、「無回答」10人

(0.9%)であった(図11)。大学体育は必修でよいと答えた者は、「必要ない」と回答した者よりも多い傾向にあった。大学体育が必修で良いと思う理由は何ですか？の質問に対しては、「体力・健康づくり」213人(47.2%)、「体を動かす場所と機会がないから」76人

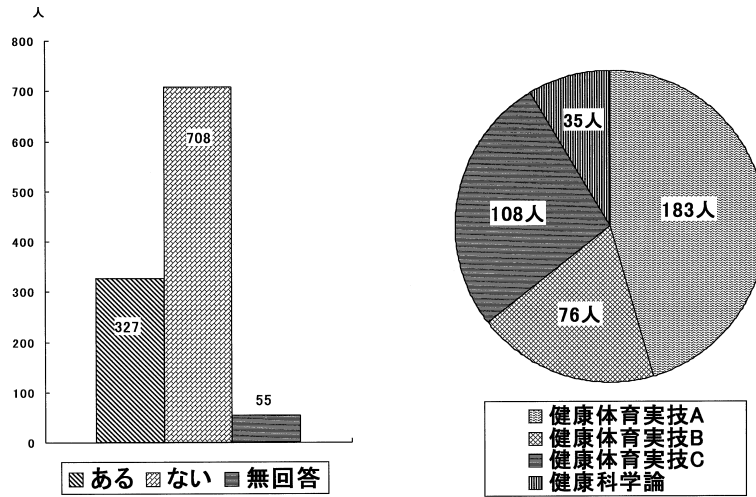


図8 今後履修したい科目の有無とその科目の調査結果

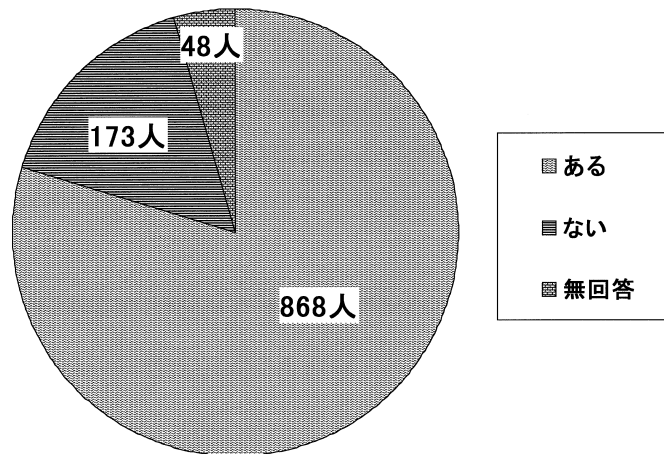


図9 今後も機会を設けて何らかの運動を実践したい希望の有無

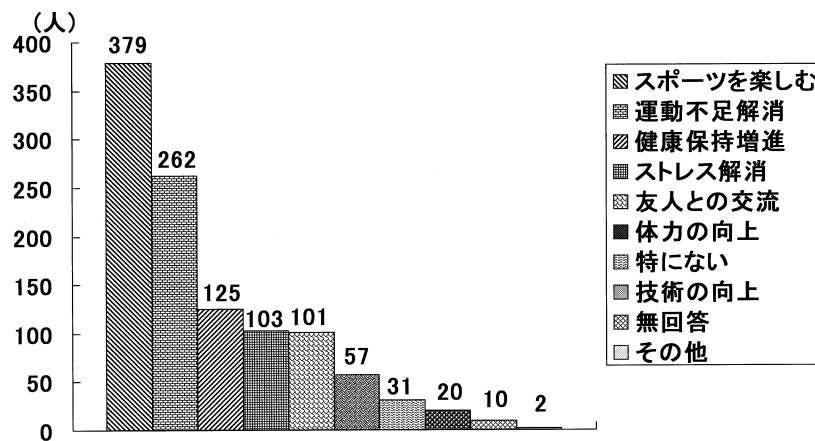


図10 大学体育実技に期待するものの調査結果

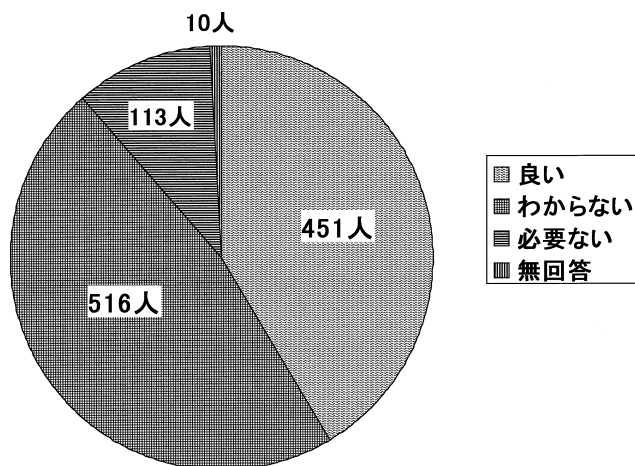


図11 大学体育は必修に関する調査結果

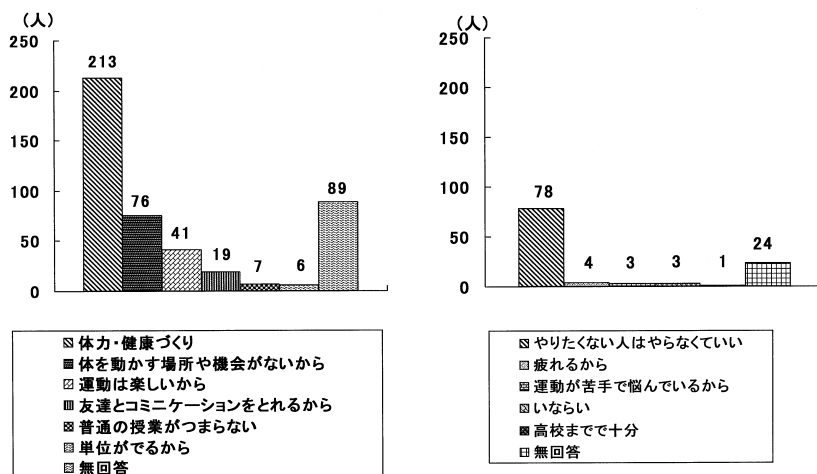


図12 大学体育が必修で良いと思う理由の調査結果
大学体育が必修でなくてもよいと思う調査結果

(16.9%)、「運動は楽しいから」41人(9.1%)、「友達とコミュニケーションをとれるから」19人(4.2%)、「普通の授業がつまらないから」7人(0.6%)、「単位がでるから」6人(0.6%)、無回答89人(19.7%)であった(図12)。大学体育が必要である理由としては、「体力・健康づくり」が213人で全体の47.2%を占めていた。一方、大学体育が必須でなくてもよいとする理由については、「やりたくない人はやらなくてよい」78人(69.0%)、「疲れるから」4人(3.5%)、「運動が苦手で悩んでいるから」3人(2.7%)、「知らない」3人(2.7%)、「高校まで十分」1人(0.9%)、「無回答」24人(21.2%)であった(図12)。大学体育が必修でなくてもよい理由では、「やりたくない人はやらなくてよい」が78人で全体の69%を占め、学生の多様化を受け入れる学生の意識が現れていた。

今後健康体育実技においてとりあげて欲しいス

ポーツ種目では、1位「バレー」289人、2位「バドミントン」214人、3位「バスケットボール」201人、4位「サッカー」122人、5位「テニス」121人、6位「卓球」120人、7位「ソフトボール」111人、8位「水泳」81人、9位「野球」63人、10位「ボーリング」57人であり、上位10種のうち球技系種目が9種目入りしており球技系種目を望んでいる傾向が強かった(図13)。

考 察

本調査は大学生を対象として、体育実技に期待するもの、個々人の健康観とスポーツ・身体活動との接点を持ちえているのかの現状を把握し、さらに今後どのように大学体育を健康教育の一環として位置付け、実践していくべきかについて提言することで

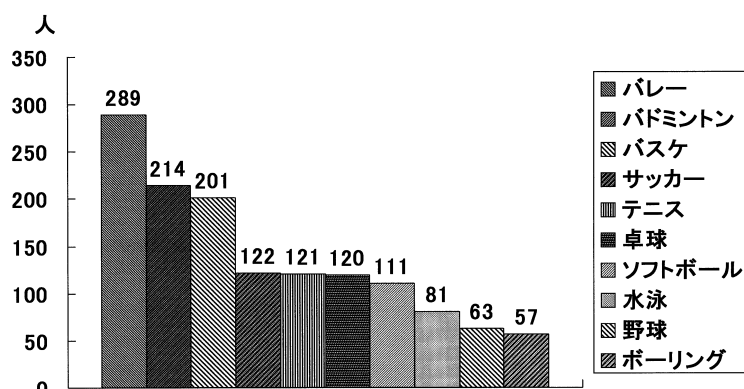


図13 健康体育実技において今後とりあげて欲しいスポーツ種目(上位10種目)

あった。

運動不足を認識している学生が、6割以上を占める現状において、体育実技は必修で良いとの回答が、必要ではないとの回答の約4倍と多数を占め、大学体育の必要性を認識している学生が多いことが明らかとなった。そして、学生が期待する内容は、やはり「体力健康づくり」であるといった回答が多かった。医療福祉系の学生を対象として行なった調査であることから、健康に対する認識の高い集団であった可能性も存在する。しかしながら、健康体育実技B(健康増進・体力づくり)よりは、健康体育実技A(球技スポーツ)を履修・希望する者が圧倒的に多く、また今後取り上げてほしい種目も、球技系のスポーツ種目が上位を占めていた。すなわち、運動不足が健康を害し、運動を通しての健康づくりは必要であるとの認識はあるものの、やはり体育実技では球技を楽しむみたい、もしくは球技系以外の種目を体育実技としてイメージすることができていないことを示す結果であると考えられる。その理由として、20才前後の世代では、まだ健康の重要性は理解しているものの、それを十分実感として認識できる年齢ではないこと、さらに小・中・高で学んできた体育授業の内容が健康づくりを反映した運動・スポーツでなく、第一義的価値において運動・スポーツ実践としてきたことにより健康づくりと運動・スポーツが結びつかないことが大きく影響していると考えられる。

こうした健康づくりと具体的スポーツ実践の隔たりを補い、生涯スポーツに発展させていく再教育の現場として大学体育の存在意義は大きいと考えられる。やはり、小・中・高とやってきたスポーツ種目をいかに健康づくりと結び付けていくかが重要となるものと考えられる。

現状の体育実技において不足している点として、体育実技Aでは履修希望と現状の履修の間に差が

あり必ずしも体育実技Aを希望している生徒が希望科目を履修できていないことが挙げられる。学校側は体育実技Aの要求が高いことから今後、これら授業の受講人数の拡大を整備しなければならない。また、実技体育Aの希望が多数でありながら体力健康づくりを基礎とした体育実技を生徒が求めていることから授業の内容としては、松岡⁴⁾が指摘するように、初等・中等教育との関連という観点からも今後の大学教育の中で検討されなくてはならないということである。これは具体的には、健康体育実技A(球技スポーツ)の中で、健康づくりを含む内容を展開していく必要がある。すなわち、小・中・高と慣れ親しんできたスポーツ種目を通して、生涯学習につながる健康増進や体力づくりについて学ぶ機会を提供するというものである。

学生の多様化、大学教育の大衆化が進行する中で、いかに体育教育を健康教育の一環として学生に受け入れられるよう展開していくかについて、積極的検討が今後も必要であると思われる。そして、「単に保健体育という一つの科目の生き残りを考えるのではなく、大学教育全体が抱える問題を的確に把握し、その問題との関連の中で保健体育科目が担うべき大学教育の課題を明確にしておかなくてはならない」⁴⁾との指摘も認識しておく必要があるのかもしれない。

「経験や勘にたよった授業から、真に科学の法則をふまえた授業へ、そして、子どもの健康、体力づくり、発育発達によりよく寄与し得る授業の創造へと発展してゆくためにも、具体的事例に即しつつ進められてゆくべきである」⁵⁾と考える。

結 論

大学生の体育実技に期待するもの、個々人の健康観と運動の接点を持ちえているのかの現状を把握し、さらに現在行なわれている体育実技に対する、

教員側と受講生の認識のずれを明確にし、今後どのように大学体育を健康教育の一環として位置付け、実践していくべきかについて提示することを目的として、K 大学開講科目健康体育実技 A (球技スポーツ)、健康体育実技 B (体力づくり)、健康体育実技 C (レクリエーション) および健康科学論の受講者 (延べ人数 1,090 名) および担当教員を対象としたアンケート調査を実施した。

その結果、体育実技は必修が良いとの回答が、必要でないとの回答の 399% と多数を占め、大学体育の必要性を認識している学生が多いことが明らかとなった。そして、学生が期待する内容は、「体力健康づくり」であるといった回答が多かったものの、健

康体育実技 B (健康増進・体力づくり) よりも、健康体育実技 A (球技スポーツ) を履修・希望する者が多く、また種目も球技系が上位を占めていた。したがって、必ずしも学生の健康づくりの意識と、本学設定の健康体育実技 A, B, C の設定が完全には一致しておらず、検討していく必要があると考えられた。今後、健康体育実技 A の発展系として、健康増進・体力づくりが展開される実技内容の構築が必要ではないかと思われる。

本研究は平成 13 年度川崎医療福祉大学プロジェクト研究助成によって実施された。

文 献

- 1) 廣橋義敬：21 世紀に指導的役割を果たし得る体育科教育とは。第 49 回日本体育学会大会号，116，1998。
- 2) 杉本厚夫：大学スポーツに未来はあるか。第 46 回日本体育学会大会号，87，1995。
- 3) SSF 笹川スポーツ財団：スポーツ人口の動向。スポーツライフデータ 2000 スポーツライフに関する調査報告書。東京，SSF 笹川スポーツ財団，20-25，2000。
- 4) 松岡信之：21 世紀の大学体育のあり方。体育科教育，1，30-33，2000。
- 5) 江橋慎四郎：体育の科学の 50 年 (最終回) —1971 年から 1982 年まで—。体育の科学，51，164-168，2001。

(平成 14 年 11 月 8 日受理)

How Should Be Physical Education in University
—An Elective Tendency of the Health and Sports Practice in K University—

Hiroya ISHIDA, Yoko HOSHIJIMA, Hiromi YANO, Syozo YONETANI and Kazuhiko KIMURA

(Accepted Nov. 8, 2002)

Key words : BALL GAME, FITNESS, RECREATION, HEALTH, REQUIRED SUBJECT

Abstract

This study will investigate the following : 1) Students' expectation physical education. 2) There relationship between recognition of health and exercise. 3) The importance of physical education in the chain of a health education of university curriculum, and 4) How to practice sports. We made inquiries of students who studied the course of Health and Sports Practice: A (ball sports), B (fitness), C (recreation sports), and lectures on Health Science at K University. As for the results, many students answered that sports practice in university had better become a required subject as opposed to an elective subject. They expected the contents of sports practice to promote health and develop physical fitness. Many students, however, selected Sports Practice A rather than B. So, they also hope to play many kinds of ball games. Accordingly, a re-examination of Health and Sports Practice courses is needed, because it is not consistent with the setting up of, and the course of study and consciousness of, students for health promotion. A class might be constructed containing health promotion and development of physical fitness as a progressive form of Sports Practice A.

Correspondence to : Hiroya ISHIDA

Master's Program in Health and Sports Sciences, Graduate School
of Medical Professions, Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.12, No.2, 2002 311-319)